

視点	2	ステップ	2～3	実施時期・回数	年長・常時
振り返りの活動及び学級での話し合い「子ども会議」					
【取組の実際】					
<p>(1) 本園では、年長児において小学校生活への接続を意識して、降園前の振り返りの活動や、学級の問題・行事に向けての相談をする話し合い「子ども会議」を意図的に取り入れている。また、そこでの話し合いの過程や結果を学年で共有したり、時には学年合同で話し合ったりしている。</p>					
<p>(2) 取組例（3例）伝えたいことを紹介する。</p>					
<p>① 振り返りの活動（写真1）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学級のみんなに伝えたいことを意見として発表 <ul style="list-style-type: none"> ・自分がうれしかったことや、がんばったこと ・明日したい遊びの紹介とその誘い など 					
<p>② 学級の問題を相談するための「子ども会議」（写真2）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見付けたカマキリをどうしよう ・片付けの時間になっても遊んでいる人がいる ・〇〇で困っている など 					
<p>③ 行事に向けての相談をするための「子ども会議」（写真3）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動会の親子競技 ・「年長の会」に向けて など 					
<p>(3) 本園では、降園時に保護者に向けて、子供たちの一日の生活の様子やそこから見取れる育ちについて、担任から口頭や写真を提示して伝えている。その際に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と結び付けながら保護者に話すことで、子供の育ちの理解につなげている。</p>					
【成果と今後の展望】					
<p>(1) 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ① これらの活動を実践することで、子供たちが周囲に向けて自分の思いを伝えようとする姿が多く見られるようになり、着実な育ちと捉えることができている。また、学級としての一体感も感じられている。 ② 保護者に育ちの側面から伝えるように心がけることで、教師自らの「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の理解や保育力の向上に結び付くと捉えている。また、保護者の我が子の育ちへの理解につながっているのはもちろんであるが、集団の育ちとしても理解していただけていると捉えている。 					
<p>(2) 今後の展望</p> <p>今回、小学校教員へのアンケートの結果から、小学校では幼稚園が想像していた以上に保護者間のトラブルについて懸念していることが分かった。幼稚園においては、子供の育ちの側面を保護者に対して伝えていくことにさらに力を入れていきたい。また、それらの取組やその成果（子供自身や親の変容）を具体的事例を挙げながら小学校に伝えていきたい。</p>					



写真1



写真2



写真3

視点	1	ステップ	2	実施時期・回数	年間・45回
----	---	------	---	---------	--------

「主体的・対話で深い学び」を踏まえた保育実践

【取組の実際】

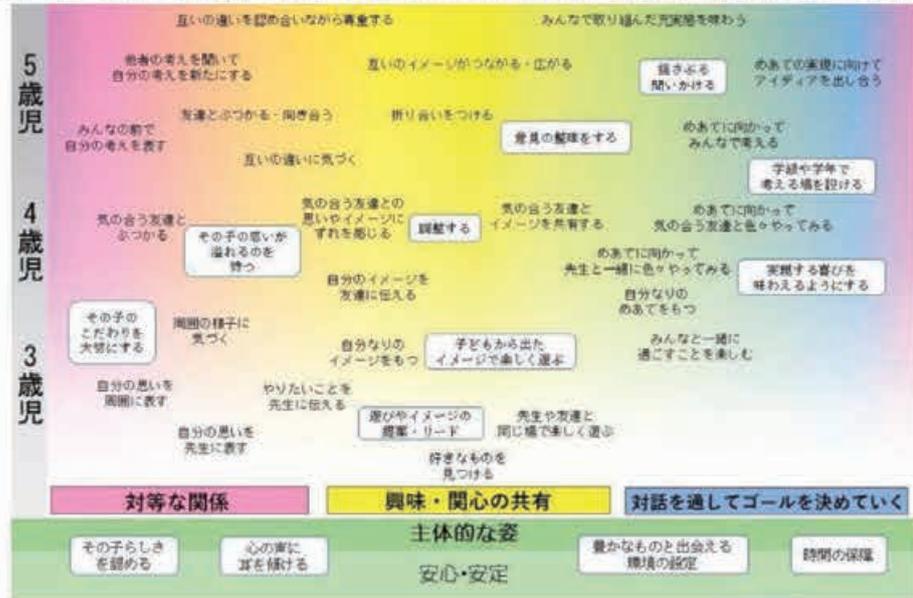
(1) 本園では、幼児が心ゆくまで遊ぶ時間や場の保障をし、自分がしたい遊びを見つけ、自分から取り組む主体的な姿を大切にしている。そこでは、教師が何もかもを決めて引っ張っていく保育ではなく、また教師が幼児の思いに流されてしまうのでもなく、幼児も教師も共に当事者＝主体となって生活を作り上げることこそが大切であると考えている。また、この数年「対話的な学びから育ちを捉える」を研究テーマとし、対話的な学びがある保育やそれを支える教師の援助のあり方の検討、および行事を含めた日常の保育の見直しと改善を重ねてきた。対話的に進める保育のさらなる充実が、深い学びにつながっていくと考える。

(2) 右の図は本園の保育における“対話的な学び”に向かう幼児の育ちの姿とそこに寄り添う教師の姿(援助)をまとめたものである。

図の下部に示している「安心・安定」「主体的な姿」は幼児の育ちの根本となるものであり、すべての学び・援助の土台となっ

ている。また、「対等な関係」「興味・関心の共有」「対話を通してゴールを決めていく」は対話的に進める援助の方向性を示す3つの柱である。

評価・振り返りの際に、①幼児の姿が対話的な学びに向かっていたか ②教師の援助は適切であったか などの指標とし、対話的に進める保育の充実に向けて活用している。



【対話的な学びに向かう幼児の姿と教師の援助】

【成果と今後の展望】

(1) 成果

遊びの中で、また行事に向けて、園児同士、園児と教師が話し合いを積み重ねながら保育実践を行うことが、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の自立心や協同性、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等をはじめ、様々な学びとなり、小学校教育へとつながっている。

(2) 今後の展望

「対話的な学びに向かう幼児の姿と教師の援助」の図は、実践の中で見られた具体的な幼児の姿で、より実態に沿ったものに変更していく。また、使用する語句の意味や定義を教員間で共通理解するとともに、第三者にわかりやすい表現に変更していく。

今後も、対話的に進めながら、幼児の深い学びにつながる保育を展開し、小学校教育へとスムーズに接続できるように、評価や振り返り、事例研究を行っていく。

視点	2	ステップ	2～3	実施時期・回数	5歳児後半
----	---	------	-----	---------	-------

「幼小接続カリキュラム」を踏まえた指導方法の工夫

【取組の実際】

(1) 「幼小接続カリキュラム」について ※トピック資料①

平成29年度、山梨大学と附属学校間の連携の推進を目的とした「教育実践・教員養成研究協議会」が設置され、組織的に幼小大の共同研究が行われている。幼稚園と小学校での共同研究が進むにつれて、双方の課題が明らかになり、一方で、そこに大学教員による研究的な視点が加わることで、互いの理解が徐々に深まってきている。「幼小接続カリキュラム」

(図1)の作成においては、幼稚園での記録を基に実際に幼児の育ちの状況を充分把握したうえで、小学校における児童の学びへとつなげていけるのかを考えてきている。特に、幼稚園と小学校の子供の実際の姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた姿として取り上げ、整理していくことにより、幼児期から児童期にかけてのつながりがわかりやすくなるよう工夫している。



(2) 「幼小接続カリキュラム」を踏まえた指導方法の工夫 ※トピック資料②

本園では、幼児の興味や関心によるプロジェクト活動を実践してきている。幼児なりに好奇心や探究心をもつことにより、自分なりに考えたり、工夫したりすることで学びへ向かう力が育まれると考えている。現在、教師が幼児の姿から「活動の要求」を見出し、幼児が主体的に活動を進められるよう計画をし、幼児と教師が対話的に生活を創り出していくことを目指している。実際には、3歳児から個々の要求を丁寧に受け止めることを大事にし、4歳児後半から徐々に幼児の要求に基づいたプロジェクト的な活動を取り入れている。5歳児においては、幼児が主体的に活動内容を進めていけるよう援助を工夫している。具体的には、遊び始める前に「なにしよう会」(図2)を行い、幼児自身が見通しをもてるようにし、降園時には、「なにしたの会」を行うことで活動を振り返ると共に、友達のしていることに対して関心をもち、自分のこととして受け止めながら、それぞれの探究心や好奇心を一層深めていけるよう配慮している。必要に応じて、実物や写真、幼児が書いた説明書、時にはOHCやプロジェクターなどの機器も用いながら、言葉での表現を補い、クラス全体で同じ情報を共有できるようにしている。このように、幼児が主体的に自分の考えを表現することを育てていくことが、小学校の生活や学習の基盤へとつながっていくのではないかと考えている。



(3) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に、「幼小接続カリキュラム」に幼児と児童の実際の場面における具体の姿や活動を位置づけることで、幼稚園と小学校の教師が子供の育ちを互いに理解し合う手掛かりとなる。また、幼稚園から小学校への学びの連続性をわかりやすく表現することができると考えている。

【成果と今後の展望】

- (1) 成果—「幼小接続カリキュラム」作成により、幼稚園、小学校の教師間で子供の育ちを共有しつつ、教育活動のつながりを検討することが出来るようになってきた。
- (2) 今後の展望—地域における課題を踏まえた「幼小接続カリキュラム」の内容を探っていく。

視点	2	ステップ	3	実施時期・回数	5歳児 11月後半 ～12月前半
----	---	------	---	---------	---------------------

グループで共通の目的に向かう活動（5歳児後半）

【取組の実際】

(1) 「わくわく造形展」に向けての取組について

本園では、12月中旬に「わくわく造形展」を開催しており、各学年発達に応じた平面作品と立体作品の展示を行っている。

5歳児Ⅳ期（11月～12月）の教育課程のねらいが

のりだす…考えたことやイメージしたことを工夫して実現していこうとする
ゆきかう…友達と目的をもって取り組み、力を出し合いながら遊びを進める
みつめる…友達と話す中で遊びの目的や見通しをもち、自分なりにどうすればよいか考える

となっているが、それに照らし合わせ、5歳児では立体作品を4～5人のグループで作ることにしている。12月中旬の造形展に向けて、11月後半から取組を始めた。

わくわく造形展に取り組むにあたり、幼児にどのようなものが作りたいかを問いかけた。すると、前年度の年長児が作っていたものを思い出し、ジェットコースター、水族館…など様々なものが出来た。そこで、「お客さん（年少児・年中児）に喜んでもらえる「きく組遊園地」を作ろう」と、投げかけた。自分が作りたいものを選び、5つのグループに分かれて活動を始めた。幼児が今までに扱ったことのある材料（空き箱、ペットボトルなどの廃材、木材、紙など）を準備しておき、自分たちで選んで使えるようにしておいた。「お客さんに喜んでもらいたい」という共通の目的があることで、それぞれがその目的のためにできることを考え、実際に材料を手に取りながら試行錯誤したり、考えたことを友達に伝え合ったりしている姿が見られた（図1）。その中で、友達と共通の目的に向かう楽しさや、友達がいることで自分の思いが実現していく満足感を感じている姿が見られた。



図1

(2) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について

「わくわく造形展」に向けての取組の中での幼児の姿を「幼稚園教育において育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から考察した。作品の見栄えではなく、活動を通して幼児がどのように思考を展開しているか、友達と関わりながら思いを交わしているのかなど、学びの過程に着目してきた。また、小学校教員と幼児の学びを共有するツールとして記録用紙（図2）を活用した。

11月27日（火） 「わくわく造形展」に向けて

活動	水族館を作るために、材料を遊ぶ
活動の様子	<p>材料置き場に行き、グループのみんなで考えようかを相談している。木材を手にとって「これ使えるんじゃないか」「これとこれを組み合わせてみようか」と話しながら、何をしようかを決めている。細長い木材を互方向に組み合わせて水族館の骨組みを作ることにした。</p> <p>また、ボール紙のふたを見つけ、「これ早く使えよう」とたたくさん集めて裏に入れていく。</p> 
資質・能力	<p>・友達と相談しながらどの材料が使えるかを選んでいる</p> <p>☑【知識】【能力】</p> <p>・今までの経験から、どの材料がよいか考えている</p> <p>☑【思考】</p> <p>・同じ長さの木材を4本組み合わせると正方形になることに気づいている</p> <p>☑【態度】</p>
考察の視点	<p>・幼児が自分たちで材料を選ぶように、扱ったことのある材料を中心に整理しておく</p> <p>・幼児が自分たちで相談しながら進んでいる様子を見守りながら、タイミングを見て必要にその材料が必要な場合、適切なものを提供していく</p> <p>・幼児の意図に応じて、手助けをする</p>

図2

【成果と今後の展望】

(1) 成果

「わくわく造形展」に向かう幼児の姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から考察することで、小学校へのつながりを見通しながら幼児の学びを読み取り、教師の援助を考えることができた。

(2) 今後の展望

記録用紙を活用しながら幼児期の学びを小学校教師に伝えることで、スムーズな接続ができるようにしていきたい。

視点	2	ステップ	2	実施時期・回数	10月下旬以降 ・6回
----	---	------	---	---------	----------------

協同性を育む「きぐみたいむ」(年長5歳児合同保育)

【取組の実際】

(1) 「きぐみたいむ」(年長5歳児合同保育)に取り組むにあたって
背景 ・2019年度は5歳児は例年より少なく、2クラス合わせて41人である。
 ・自ら選んで遊ぶ遊びでは2クラスの子供が交じって遊んでいる。
 ・例年、年長児は毎月の誕生会と3学期の「きぐみげきじょう」を2クラス合同で行っている。
 ・小学校は、3クラスに分かれ、外部から入学の子供たちと混合のクラス編成である。
経緯 運動会をきっかけに、クラスで共通の目的に向かって、話し合ったり協力したりする姿が見られるようになった。友達関係の深まりや広がりも見られるようになったが、もっといろいろな友達と関わり、様々な物の見方や考え方に触れられるように、2クラス合同で生活したり、活動したりする機会をつくるようにした。
目的 クラスの枠を超えた友達関係の中で自己を発揮する力や新たな友達に関わろうとする力を育む。

(2) **取組内容**

活動内容の変容：取組当初は考え方や見方が広がることを期待し、共通の活動について話し合う機会をもったが、人数が多いため、聞くことが難しく話し合いは深まらなかった。そこで触れ合い遊びや、友達とチャレンジする遊びを取り入れ「きぐみたいむ」が楽しいと感じられるようにした。その中で様々な友達と関わる機会を意図的に作り、友達関係の広がりに合わせて活動を変えていった。

(以下抜粋)

活動	実施日	子供の姿	10の姿
やくしの里(地域の老人保健施設)訪問についての話し合い	10/16	様々な意見が出たが、友達の話の聞いたり、話し合いに参加したりすることが難しい子供がいた。	【社会生活との関わり】 【言葉による伝え合い】 【思考力】
ふれあい遊び	10/29	クラスを超えていろいろな友達と関わって遊ぶことができた。	【協同性】 【言葉による伝え合い】
遊びの振り返り	11/7	他のクラスの友達の遊びの様子や考えていること、思っていることに関心を示して聞いていた。	【言葉による伝え合い】 【思考力】
ミッションボックスチャレンジ	11/7	普段関わりのない子供同士が、励ましあったり、喜びあったりする姿が見られた。	【健康な心と体】【自立心】 【言葉による伝え合い】
・じゃんけん列車 ・遊びの振り返り	11/18	いろいろな友達とじゃんけんをして、つながっていく面白さを全員で共有することができた。	【協同性】 【言葉による伝え合い】
フラフープで一緒に遊ぶ(トピック参照)	12/5	クラスを超えて声をかけあって遊ぶ姿が見られた。	【健康】【協同性】【思考力】 【言葉による伝え合い】 【数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚】



教師の援助の変化：はじめはクラスの違う子供同士の関係づくりを意識して関わっていたが、子供たちが新たなつながりを楽しめるようになってきたので、新しい関係の中でそれぞれの子供たちが力を発揮できることを考えながら関わるようになった。

(3) **10の姿との関連性**

「協同性」「自立心」につながる姿が「きぐみたいむ」でも見られるようになったことは、小学校以降、新たな友達関係の中で学びを深める力の基礎が養われたと考える。また、様々な活動を取り入れたことで、「健康な心と体」「社会生活との関わり」「数量や図形への関心・感覚」「豊かな感性と表現」につながる姿が多く見られた。更には、すべての活動の中に、「言葉による伝え合い」や「思考力の芽生え」につながる姿も見られた。

【成果と今後の展望】

(1) **成果**

- ①子供の姿に合わせて活動内容を見直し、教師の関わり方も変えてきたことで、「きぐみたいむ」を積み重ねるごとに、友達関係が広がり、関わり方の多様性が生まれてきている。また、新しい集団の中でも自分の力を発揮することができるようになってきている。
- ②合同で行うからこそ、友達からたくさんの刺激を受け、物の捉え方や、考え方の広がりにつながった。活動によってはクラスで行う方がより深まるものもあり、子供の実態やねらいに合わせて保育形態を選択することが望ましい。
- ③担任以外の先生から話を聞いて活動に取り組むことは、話を聞き取る力の育ちや、初めて出会う小学校の先生の話も積極的に聞こうとする態度につながると思われる。

(2) **今後の展望**

- ①「きぐみたいむ」での子供たちの経験や育ちを明らかにし、時期や内容など次年度以降にどのように取り入れるかを検討する。
- ②2クラスを解体して、混合のグループをいくつかつくるなど、新たな保育形態を探る。

視点	3	ステップ	2～3	実施時期・回数	年間・2回
----	---	------	-----	---------	-------

附属幼稚園に係る就学支援協議会

【取組の実際】

(1) 宮崎大学教育学部附属学校園では、共同研究のテーマを「かかわる力」とし、各校園の主題研究や各教科等の幼小中学部の共同研究において、テーマと関連づけて研究を進め、系統的な指導や交流活動等を行ってきた。さらに、幼小連絡会においては、子供一人一人の実態や育ちについて、また援助や指導についての共通理解を図ってきた。しかし、附属学校園全体で子供を見るという考えのもと「附属幼稚園に係る就学支援協議会」を開催することとした。この会の目的は、本園に在籍する幼児に対し、子供のもっている力を十分に伸ばすために、一人一人の特性や発達に応じた、幼児によい学びとなるための就学支援に関する情報共有である。メンバーは、附属学校園統括長、附属小学校、中学校の特別支援教育担当者各1名、附属幼稚園園長及び教頭、特別支援コーディネーターである。この会では、園児の観察をもとに、就学にあたっての協議を行うことで、小学校の就学指導に生かすようにしている。

(2) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について

① 集団活動の指導案に、活動の中で育つと期待している姿と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）と関連しているものを指導案の最後に10の姿の項目の番号で記入した。

また、活動の中で小学校の教科等（低学年を中心）につながると予想できる内容について、小学校学習指導要領の各教科等の内容の番号や記号等で記入した。（図1）



② 附属学校園にかかる就学支援協議会を実施し、観察後「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点からの幼稚園職員の説明や観察者からの質問及び意見をもとに協議を行い、子供の情報共有を図った。

③ 協議会の情報をもとに、幼稚園内で話し合いを行い、就学に向けた今後の援助の在り方について、共通理解を図った。

【成果と今後の展望】

(1) 成果

- ① 幼稚園では教師が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識しながら活動を展開することができた。
- ② 個別の教育支援計画に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を記載したことで、幼児の発達や実態、今後の援助について、小学校への円滑な接続に生かすことができた。

(2) 今後の展望

集団活動の指導案に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「教科等との関連」を記載したことで、さらに相互理解を深め、円滑な接続を進める。

視点	2	ステップ	2～3	実施時期・回数	年間12回
フォトカンファレンス					
【取組の実際】					
<p>(1) 北海道教育大学附属旭川幼稚園では、今年度から、「やってみたい」を育む環境づくり～北国の自然を活かす～をテーマとして研究に取り組んでいる。本研究では、一見豊かに見える本園の環境が本当に幼児の育ちにとって必要なものとなっているのか、私たち保育者がよいと思っで行っている環境構成が幼児にとって本当に「やってみたい」と思えるものになっているのか、本園ならではの豊かな自然がどのように遊びに関わっているのか、といった問題について検討してきた。こうした取組によって保育の質の向上を図ってきたことについて小学校教員への理解を促進すると共に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共有を図ってきた。その方法の一例を紹介する。</p>					
<p>(2) フォトカンファレンスの方法</p> <p>① 事前に、担任がみんなで話し合いたいと思う事例の写真を選び、担任からの情報（その時の幼児の状況）を書き入れる。</p> <p>② 写真を見ながら、担任が情報を説明する。その後、参加者全員で「環境や保育の中身」はどうであったか、これからの「育ちの方向性」はどのように考えたらよいか（その際、キーワードを入れていく。）を考え記入していく。また、疑問等が残る場合は、それも記入していく。</p> <p>③ その後の保育の中で、カンファレンスで話し合われたことを生かしていく。</p>					
<p>(3) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について</p> <p>① フォトカンファレンスで話し合う項目の1つとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」も記入する。</p> <p>② 10の姿をそのままの言葉として使わず、年齢やその時の状況に合ったものに変えて使う。 例：「自立心」⇒「自立のスタート」（3歳児） 「社会生活との関わり」⇒「小さな社会との関わり」（3歳児） 「道徳性・規範意識の芽生え」⇒「他者意識」（4歳児）</p> <p>③ 3学期に実施する「幼小連携委員会」「幼小中連携会議」において、フォトカンファレンスについて紹介して理解を深める。また、小学校教員との引継ぎにおいて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用した説明を行う。</p>					
【成果と今後の展望】					
<p>(1) 成果 幼児の姿をいろいろな視点で見ることによって、担任だけでは気付けなかったことに気付いたり、幼児の今後の育ちを考える上での参考となった。また、副担任、支援員にも参加してもらうことで、幼児の育ちの共通理解を図ることができた。</p>					
<p>(2) 今後の展望 こうした幼稚園における保育向上のための取組や視点について、小学校教員と共有していくことで、幼小の教員による教育課程の改善を図っていく。</p>					



視点	3	ステップ	2～3	実施時期・回数	年間・4～5回
スタートカリキュラムの見直しと改善					
【取組の実際】					
(1) 附属四校園での連携・交流の取組					
<p>本園を含む福島大学附属小学校・中学校・特別支援学校は、「附属四校園が目指す『社会に開かれた教育課程』の具現化」に向けて、毎年四校園での合同研修会を行っている。研修会では当初、教科の枠を中心とするいくつかのグループに分かれて校種間連携を進めていたが、近年では教科を超えた枠組みで研究を進めようとグループ編成を組み替える努力を行ってきた。その結果、一昨年度から、各校園の教務主任を中心とした「教育目標・評価」、研究主任を中心とした「確かな学力」、小学校低学年担当教員、特別支援学校教員や養護教諭などによる「学習生活習慣」、道徳を中心とした「豊かな心」と大きく4つのグループに分けての研究がスタートした。幼稚園教員もいずれかのグループに属して協議に参加しているが、人員が限られているため幼稚園教員としての視点が抜け落ちてしまうグループもある。</p>					
(2) 附属小学校で作成したスタートカリキュラム					
<p>昨年度、スタートカリキュラム作成の分科会が「学習生活習慣」の中に位置付けられたが、この分科会に幼稚園教員が人員を割くことができず、スタートカリキュラムは小学校低学年の教員を中心に作成が始まった。作成の際に幼稚園教員はほぼ関わっておらず、また年度末ぎりぎりにできあがった一昨年度のカリキュラムを見ると、子供の実態とはかけ離れたものになっていた。スタートカリキュラムは小学校におけるカリキュラムであることは間違いない。しかし、その作成にあたっては、せめて幼稚園の意見を取り入れてほしいと考えた。そこで、昨年の合同研修会ではその点について幼稚園教員が意見を述べたことにより、入学を間近に控えた幼稚園児の期待や不安感などにも配慮した修正案を作成し今年度を迎えた。</p>					
(3) 幼稚園教員の意見を受けての修正					
<p>今年度は、昨年度の修正を受けた第2案を基に、幼稚園教員が気付いたことを付箋に書きとめ、話し合いの場で活用している。小学校教員が受け止める「幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿」と、幼稚園教員が思い描くそれとはかなりの食い違いがある。そこで、相互にその違いを知り、摺り合わせ作業を行うことを協力しながら進めている。</p>					
【成果と今後の展望】					
(1) 成果					
<p>同じ言葉を使ってもなかなか伝わらないことがあり、そもそもの校種の違いが教育観や子供の見取りにも影響していることが分かった。一人の子供を幼稚園から小学校へとつながりながら育てて行くためには、お互いの違いを把握しつつ、共通な言葉を見いだしながら時には歩み寄り、時にはお互いを尊重しながらそれぞれの校種の中で教育（保育）を進めていくことも必要だと感じた。</p>					
(2) 今後の展望					
<p>何のために連携・交流を行うのか、何のためにスタートカリキュラムを作成するのか、常に子供を中心に据えながら、お互いに実のある連携・交流でありたいと考えている。また、小学校ありきの幼稚園ではなく、幼稚園での学びを小学校教員（或いは保護者や地域の方々）に発信できるよう工夫していきたい。</p>					

視点	2	ステップ	4	実施時期・回数	11月・継続1ヶ月
----	---	------	---	---------	-----------

「投げる」動作・遊びの多様性を小学校の学びへとつなげる

【取組の実際】

- (1) 福井大学教育学部義務教育学校前期課程1年生の体育の授業を参観した。(図1)「投げる」をテーマに、上手に投げるためにはフォームやボールの扱い方はどうするとよいのか、児童と教師が協働的に探究しながら高め合う姿を参観した。その後の研究会も参加し、授業を振り返りながら、幼児教育において、「投げる」をどう捉えるとよいか、どのように遊びの中で取り入れていくとよいかを教員間で話し合った。幼児教育において、まずは様々な「投げる」素材にふれ、「投げる」方法を考え、「投げる」楽しさを味わい、「投げる」ことが好きになるプロセスが大切だと考え、保育の中で実践をすることにした。
- (2) ①ドングリロケットを飛ばしてみよう
秋の素材を使って、ドングリコロコロや松ぼっくり剣玉など様々なおもちゃを作って遊んでいたが、その中で、ドングリロケット遊びが始まった。ドングリにタフロープをつけて、投げるとヒラヒラ飛んでいくことに楽しさを感じ、何回も投げてみる(図2)。その内に「先生、なんか的が欲しい」と提案があり、一緒に的を作り、ドングリロケット飛ばしを楽しんだ。その横で、紙飛行機で的を狙って投げる幼児(図3)、手裏剣を使って投げる幼児とその投げるモノも工夫する幼児もいた。
- ②流れ星ボールで投げてみよう
ドングリロケットコーナーの中に新聞紙を用意しておいた。一人の男児がその新聞紙でボールを作り、タフロープをつけ「流れ星ボール出来上がり!」と嬉しそうにそのボールを投げ始めた。ドングリよりも、重みがあることに気づき、飛距離が出る。「これなら後ろからでも届くよ!」と周りの幼児に自慢げに伝える。ペットボトルのふたで作る幼児もいた。
- ③あのお月様には届くかな?
保育室の天井付近に小さなフラフープで的を作った。そこには、新聞紙ボールでないと届かないことに気付いた幼児らは、新聞紙ボールを作り、挑戦し始めた(図4)。台を置いて、少しでも上から投げるとよいことに気付く。逆手を的に向けてから、投げる幼児もいた。難しいため、何回も何回も投げて挑戦する姿が見られた。
- ④みんなでボール投げを楽しもう。
みんなの時間で、遊戯室でボールお引越しゲームを楽しんだ。コートの中の真ん中にある網の上を越え、相手の陣地に玉を入れていく。友達と一緒に協力しながら夢中になって投げて遊ぶ姿が見られた。
- (3) 幼児期の遊びの中の学びを、前期課程の先生と話し合う。
幼稚園での「投げる」遊びについて、小学校の1年生の教員と事例を元に話し合った。幼児期の「投げる」遊びの多様性について確認し、また小学校教育では、様々なボール運動につながるための体の使い方、ボールの扱い方などより高度になっていくことを共有し合った。



図1



図2



図3



図4



図5

【成果と今後の展望】

- (1) 成果
小学校の授業から「投げる」遊びについて幼稚園教員ももう一度捉え直すきっかけになった。また、幼児期での「投げる」遊びの好きになっていくプロセスを小学校教員に伝えることで、お互いの教育の系統性や発達段階の違いなどについて再認識することができた。
- (2) 今後の展望
様々な学習、遊びにおいて、お互いの授業・保育を見る中で、それぞれの教育がどのようにつながっていくのか、今の時点でどう生かしていくとよいのかなどについて、様々な視点、教科で柔軟に捉えていく必要がある。

視点	3	ステップ	2	実施時期・回数	2017年10月・1回
幼小で互いの授業・保育を見合う					
【取組の実際】					
<p>(1) 京都教育大学桃山地区学校園では、「一貫性」「連続性」「互惠性」を連携教育のための三要素であると捉え、連携研究を進めている。教科ごとの部会に分かれているが、幼稚園においては遊びを通して得られる学びを教科によって分けることができないため、教科別部会とは別に幼小部会を立ち上げ、幼小の学びの連続性を意識しながら連携教育を行っている。特に平成29年度からは、スタートカリキュラム作成を見据え、幼小の教員で保育・授業を見合い、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から幼児児童の学びの在り様を検討し整理している。平成29年度には「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「思考力の芽生え」「自立心」の4つの視点から、平成30年度には「社会生活とのかかわり」「豊かな感性と表現」の2つの視点から見取ることにした。</p> <p>(2) 下記は、平成29年度に幼小の教員が見合った5歳児保育のビデオ記録をもとに、学びを捉える検討会をした際の事例である。</p> <p>① 京都教育大学と附属学校園で連携している「グローバル人材育成プロジェクト」の一環として、附属桃山小学校・桃山中学校でALTとして勤務している外国人講師が、幼稚園にも月に一度来園し、幼児と交流活動を行っている。幼児はブルキナファソ出身の講師「ジョン先生」に4歳児の頃から接し、5歳児に進級して交流する機会がさらに増えたことで、親しみを深めてきた。そこで、ジョン先生の国でよく使われている楽器「カフォン」に触れる活動を計画した。附属桃山小学校が十分な数のカフォンを有していることから、小学校の環境を知ることにもつながるのではないかと考えたからである。</p> <p>② 活動はビデオ録画し、後の小学校教員や、この保育に参加していなかった幼稚園の他教員と共に視聴し、振り返り、「幼児期の終わりまでの育ってほしい10の姿」のうち、「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「思考力」「自立心」4つの視点から幼児の学びを各々見取り、見取り方やその理由等を話し合った。それを表にまとめて共有した。</p> <p>(3) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の活用について</p> <p>① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、幼児の姿を幼小教員で見合うことで、幼稚園教員は各項目が関連し合うと捉えていたことが分かった。これに対し、小学校教員は、教科の学び、すなわち、この研究の中では特に「思考力」を中心に考え、他の項目は「思考力」を支える要素として捉える傾向があることが分かった。</p>					
【成果と今後の展望】					
<p>(1) 成果 幼小教員が同じ実践を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」から見合うことで、検討する視点が定まり、幼稚園教員と小学校教員の見取り方の相違が明確になった。</p> <p>(2) 今後の展望 この研究では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の4つの項目しか検討できなかったが、他の項目でも具体的な実践を、対話を通して検討することを通して、幼児児童の学びの連続性を考慮したスタートカリキュラムへとつなげていきたい。</p>					

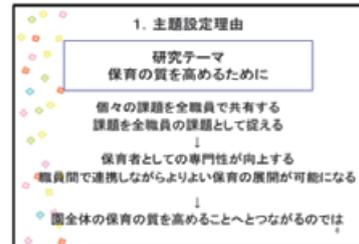


視点	1	ステップ	2	実施時期・回数	年間・3回
----	---	------	---	---------	-------

異校種の教育についての理解の推進

【取組の実際】

- (1) 兵庫教育大学附属学校園では、幼稚園と小学校の接続に限らず、中学校も含めて、「子どもの未来をデザインする」ことを掲げ、幼小中の一貫した教育を通して、子供と共に教員や保護者が成長し、さらに地域とともに成長し続ける附属学校園を目指している。幼稚園、小学校、中学校の附属3校園の全教員が参加する三附属連携推進協議会を年間3回開催し、教育内容等の連携したカリキュラムや取組について協議したり、それぞれの教育研究活動について紹介したり、合同で研修を受けたりしている。また、その中の教科等の部会の形で、それぞれの授業・保育を参観したり、教育の在り方について必要に応じて大学教員も参加して検討したりする集まりももっている。検討された附属3校園の連携のカリキュラムやその取組の一部は、実践に移している。
- (2) 幼小中の接続をより確かなものにすることを目指し、各校園の教員が他校種の教育についての理解をより一層深めるために今年度は、三附属連携推進協議会の場を使って、各校園の教育について、研究活動の紹介を中心に発表を行った。
- (3) 本園は、「保育の質を高めるために」という研究テーマで平成28年度から平成30年度にかけて実施した実践研究について、幼稚園教育の基本的な考え方や指導の在り方等も示しながら紹介した。各年度の研究のサブテーマは、「記録から幼児のよさを共有する（平成28年度）」、「子供のよさが学びにつながる保育に向けて（平成29年度）」、「学びが充実する保育に向けて（平成30年度）」である。その際、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」「主体的・対話的で深い学び」等小学校教育との連続性の視点も含めながら、また、保育場面の写真等を多く提示し、できるだけ具体的な姿が伝わるように紹介し、小中学校の教員にも理解しやすいようにした。



【成果と今後の展望】

- (1) 成果
他校種の教育についての理解をより深めることができた。幼稚園教員が、小学校や中学校の教育や大切にしている事柄について理解を深めることができただけでなく、小中学校の教員に対して、幼稚園教育についての理解を深めてもらう機会になったと考えられる。異校種の教育についての理解を促進していくことが、幼小接続の取組を進めていくためにも最も重要なことであると考えられる。
- (2) 今後の展望
小中学校の教員は、そのほとんどが人事交流で来ているので、幼稚園教育、特に附属幼稚園の教育についての理解が十分でない場合が多い。幼小接続を考えるためにも、三附属連携推進協議会を定期的に開催していくと共に、今回のようなそれぞれの教育や研究を紹介し合う場を継続的につくっていくことが大切であると考えられる。

視 点	1	ステップ	2	実施時期・回数	年間・11回
幼小連携における食育指導の実際					
【取組の実際】					
<p>(1) 小学校栄養教諭と幼稚園養護教諭の相互観察</p> <p>本年度は附属小学校に、異動により新しい栄養教諭が着任したため、園児の弁当の実態把握(弁当の内容や食べる様子)をしたいという申し出があった。そのことをきっかけに、これまで何度も園に足を運び、弁当時の園児の様子や弁当の中身について観察を続けてもらっている。本園で食育を担当している養護教諭も附属小学校の給食の様子を複数回観察し、お互いの食育指導に生かしている。栄養教諭からは、「おかずの内容が偏っている子供がいる」ことや「食べやすいように、ご飯もおかずも小さく形作られている」ことなどに気づいたという報告があった。また、本園養護教諭は「園児の弁当の量が少ないままである」という指摘を受け、本園保護者への啓発につながった。附属小学校栄養教諭と本園養護教諭が密に連絡を取り合い、お互いに協力し合いながら食育指導を進めている。</p>					
<p>(2) 小学校栄養教諭による食育に関する講話</p> <p>10月29日(火)に附属小学校の山崎栄養教諭が本園保護者や外部の保護者を対象に食育に関する講話を行った。入学までに家庭で心がけてほしいことや栄養のバランスのとれた食事の重要性、お弁当づくりの際のヒントなどを話していただき、講話後の保護者の感想からも高い評価を得ていたことが分かる。実際に、その後の子供たちの弁当の内容に変化が見られ、野菜を使ったおかずが増えた子供も多くなった。</p>					
<p>(3) 幼稚園における小学校の給食試食会</p> <p>年長児保護者の多くが、小学校入学後の給食について不安に思っていることは、以前から見られる傾向である。本園では毎年、年長児及び希望する年長児保護者を対象に「給食試食会」を実施している。</p> <p>保護者が、附属小学校の給食室に給食を取りに行き、年長児の保育室で配膳をして、それを年長児が食べるという活動である。子供たちが給食を食べる様子のある程度参観したら、保護者は遊戯室で給食を試食する。</p>					
【成果と今後の展望】					
<p>(1) 成果</p> <p>① これまで小学校栄養教諭は、本園園児が入学してから食事の実態や様子を知るようになっていたが、入学前から実態把握ができたことで、入学直後の給食指導がスムーズに進むと考えられる。</p> <p>② 本園養護教諭からも本園保護者に対して、小学校入学前に家庭でできる準備について指導ができた。</p>					
<p>(2) 今後の展望</p> <p>幼稚園と小学校の連携・接続の第一歩は、職員同士の人的交流であると考え。本年度から小学校栄養教諭と本園養護教諭の本格的な連携が始まった。今後もこの体制を維持しながら、連携体制や内容の精選・強化を図っていきたい。</p>					



視点	1	ステップ	2	実施時期・回数	通年
「グローバル人材の育成」の素地を育む					
【取組の実際】					
<p>(1) 大分県教育委員会の施策の実現に寄与する「四校園協働研究推進委員会」 大分大学教育学部附属学校園では、県教委の教育施策「グローバル人材の育成」を共通のテーマに掲げ、協働で研究に取り組んでいる。「大分県のグローバル人材育成推進プラン」（第2ステージ）の重点ポイントは以下の通りである。</p> <p style="text-align: center;">【『5つの力』の総合力」育成の継続と充実】</p> <p>①挑戦意欲と責任感・使命感→国際的視野の涵養 ②多様性を受け入れ協働する力→継続的な国際交流の充実 ③大分県や日本への深い理解→伝統や文化に関する教育の充実 ④知識・教養に基づき、論理的に考え伝える力→主体的・対話的で深い学びを実現する授業の推進 ⑤英語力→英語「発信力」の強化</p> <p>幼稚園では、5つの力の中の「①挑戦意欲と責任感・使命感」「②多様性を受け入れ協働する力」の2つについては、幼稚園の「遊びを通じた教育」の中で十分に育んでいける内容であると考えた。</p> <p>(2) 「挑戦意欲と責任感・使命感」と「多様性を受け入れ協働する力」を育む保育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挑戦意欲を喚起する「遊び」→一輪車・竹馬・こままわし・フラフープ・けん玉・縄跳びなど 先生や友達がしているのを見て、「やりたい」「できるようになりたい」「もっと上手になりたい」という気持ちが持てるように支援し、できるようになった喜びをたくさん経験させることによって、あきらめずに取り組めば自分もできるようになることを体験を通して学ばせることができる。各年齢に応じたチャレンジ遊びを子供たちに提案して取り組んでいる。 ・責任感や使命感を持たせる活動→小動物の世話・植物の栽培・当番活動など 生き物をかわいいと感じて触れ合うだけではなく、長期にわたり世話をさせることによって、命を守り育てる責任の重さを、自分の命や成長と重ねながら考える機会とすることができる。 また、年齢に応じた当番活動をさせることで、子供にとって最小の社会である学級の一員であることの自覚を促し、集団に寄与することの大切さを感じさせることができる。 ・人種や母国語の違う人との交流はできないが、多様性受け入れの素地となるのは、人を差別したり、偏見を持ったりすることのない「人権力」と考えている。そのためには、まず身近で毎日生活している友達に対する分け隔てのない関わり方や、そのためのコミュニケーション力から育てる必要がある。「人権力の育成」を重点目標に掲げ、年間を通して保育実践すると共に11月に特設で「人権を考える保育」をし、保護者を巻き込んだ懇談会をもつなど、家庭教育への汎化もねらっている。 <p>(3) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について 「10の姿」を方向目標として念頭に置き、保育案を立てることは日々行っているが、教育課程に番号で記入するなどして位置づけることはしない。今年度末に改訂した「教育課程」を公開する予定だが、「10の姿」の捉え方に誤解を生じる危険性を払拭できないことが理由である。</p>					
【成果と今後の展望】					
<p>(1) 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「育てたい資質・能力」で12年間を貫くという今回の改訂に添った取組であることから、新しいねらいを付加することなく取り組むことができるため、多忙感・疲労感に繋がりにくい。 <p>(2) 今後の展望</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「5領域」をバランス良く取り入れた内容であることと、まず第一に子供の実態に即した内容であることが必要である。それが十分に達成できれば、自ずと「10の姿」に近づけると考えている。「10の姿」によって、評価のための評価に陥らないことが大切であると考えている。 					



【ハードルの高い一輪車】